



当サイトはこちらからご覧になれます。

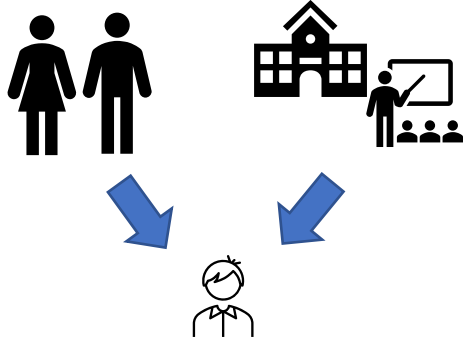
★子ども論

—「子ども」の誕生はつい最近?!—

子ども論は評論の重要テーマの一つです。「子ども」について、私たちは知っていそうで知らないことばかりなのです。自分自身も子どもだった頃があるわけですが、改めて今「子ども」について考えてみると、思いもよらない発見があるものです。

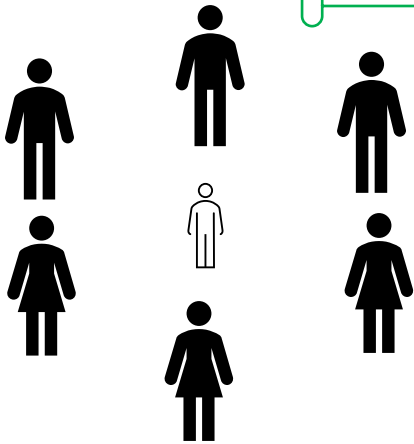
「子ども」というと、親などに守られながら教育を受け、いずれ自立していく存在だと考えるのが一般的です。しかし、実はこの考え方は近代以降の考え方であり、近代以前はそうした考え方をしていませんでした。中世までは、子どもは「小さな大人」であり、早くから大人達に混ぜて仕事を覚えなければならぬ存在でした。なんだか**徒弟制度**のお弟子さんみたいですね。アリエスという人は、今で言う「子ども」の概念は、近代以降に生まれたことに気がつきました。アリエスの著書『へ子供への誕生』というタイトルがそれをよく物語っています。

近代以降
「子ども」



時間をかけてじっくり養育!

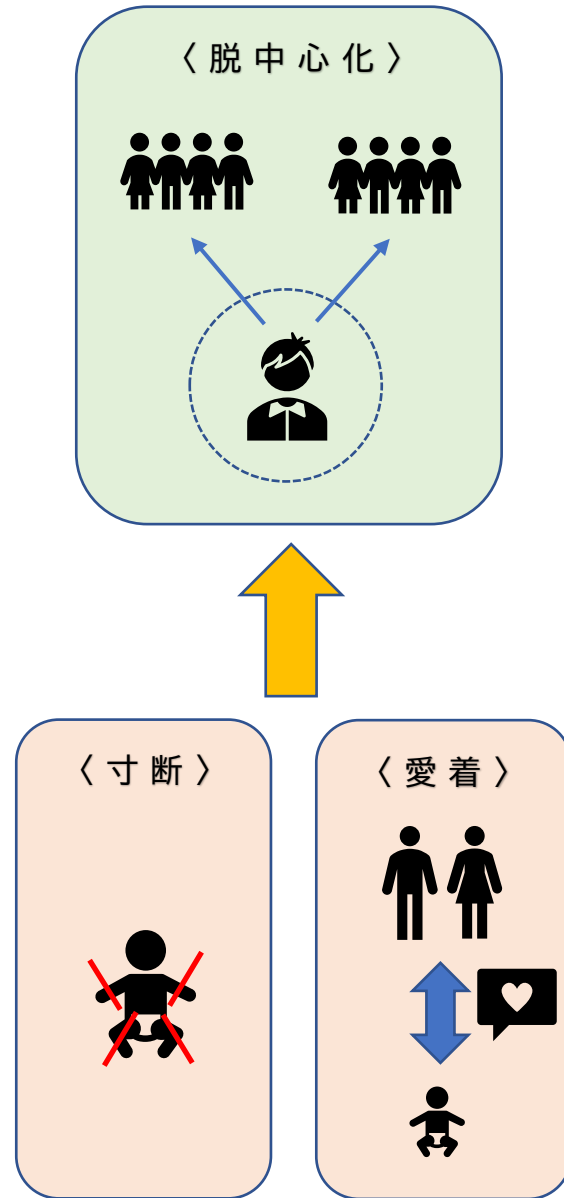
近代以前
「小さな大人」



仕事を覚えて早く一人前に!

幼少期の子どもについて考えてみましょう。エリクソンという人が幼少期の**発達課題**に「基本的信頼」を挙げました。親との信頼関係がきちんと築けることで「自分は存在する価値がある」と思えるようになります。つまり、**愛着**を築くことが大切なのです。この**適応**に失敗すると、人間不信に陥ります。また、幼少期の子どもは自分自身の全体像が**把握**できておらず、手足が**寸断**されたイメージを抱きます。では、私たちはいつ自身の全体像を把握できるようになったのでしょうか？それは「鏡」に映った自分を見たときです。それ以来私たちは「鏡」に映った像を自分の全体像としてイメージするようになるのです。

さらに、子どもは七歳前後までは自己中心性が強いですが、以降は段々と他人の存在を意識するようになり、自己中心性が弱まってきます。ピアジェという人はこれを「脱中心化」と呼びました。



◎ 評論 キーワード

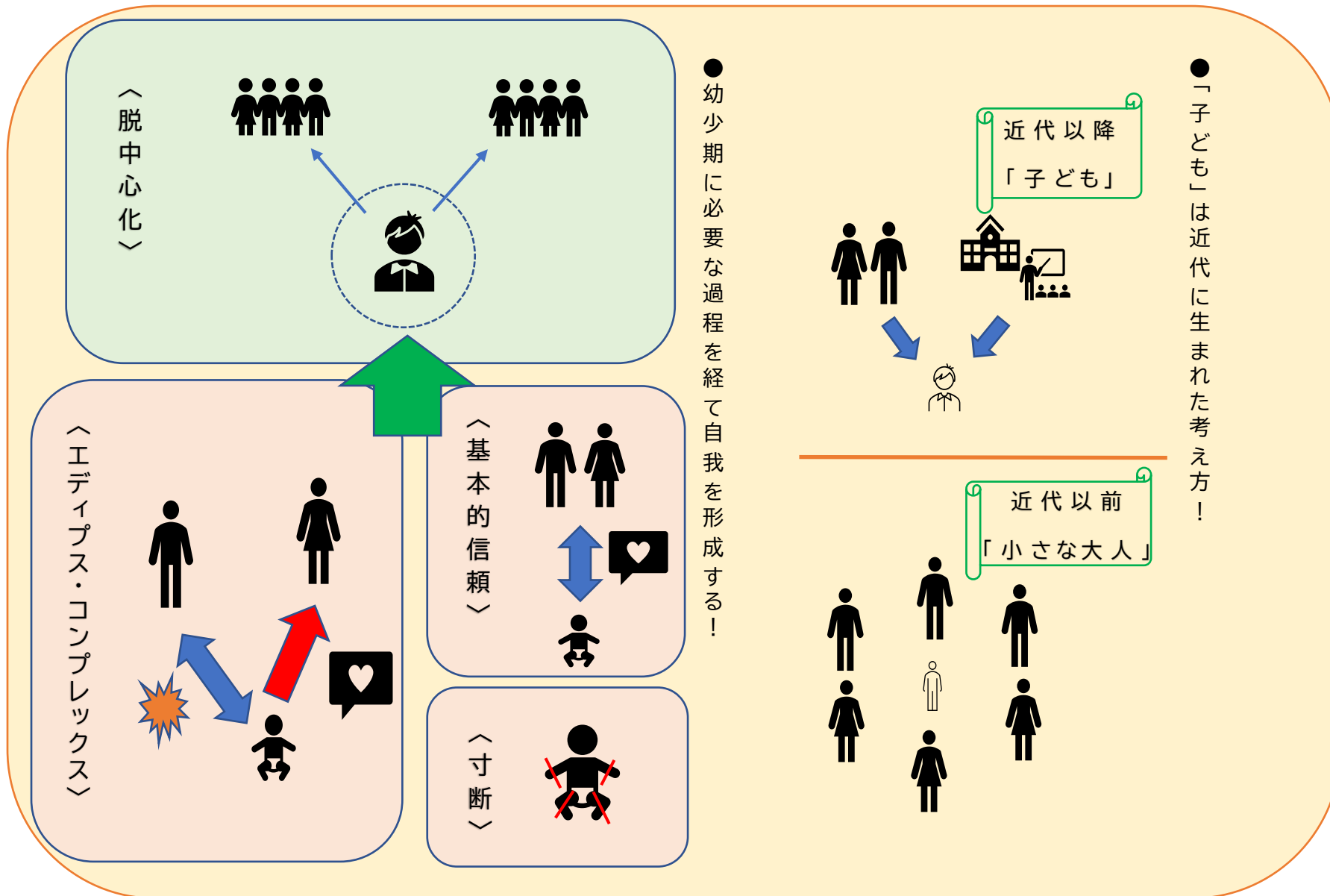
- ・ 自立…自分以外の助けなしで、物事をやっていくこと。
- ・ 徒弟制度…職業教育制度。徒弟は見習い・弟子のこと。
- ・ 発達課題…人間が各発達段階で達成すべき課題。
- ・ 愛着…慣れ親しんでいる人に惹かれること。
- ・ 適応…その場によく当てはまること。
- ・ 把握…しっかりと理解すること。
- ・ 寸断…バラバラに断ち切ること。

親からすると、血のつながった子どもはとても近しい存在です。それゆえに、子どもが自分たちと同じように物事を考えているだろうと決めつけてしまいがちです。しかし、どんなに近しい存在であっても、子どもは他者なのであり、大人には絶対に分からない「他性」を持っています。そこに気づかないと、言うことを聞かない子どもに対してひどく腹を立て、虐待を加えたりネグレクトをしたりする親が出てきてしまいます。

子どもからしても、血のつながった親はとても近しい存在です。フロイトという人は、子どもが自我を形成する際に、エディプス・コンプレックスに陥ると言います。これは男児に使うことが多いですが、異性の親を求め、同性の親を排除しようとすることを指します。子どもは異性の親を求めながらも、無意識にそれを抑圧する葛藤を通じて、自我を形成していくと考えられるのです。

◎ 評論 キーワード

- ・ **他性**：相手の絶対に理解できない側面。
- ・ **虐待**：ひどい扱いをすること。
- ・ **ネグレクト**：無視すること。精神的な虐待に分類される。
- ・ **自我**：自己。自分自身。各個人の意識。
- ・ **エディプス・コンプレックス**：異性の親を求め、同性の親を排除しようとすること。フロイトの用語。
- ・ **無意識**：自分が自分の行為に気づかずにいること。
- ・ **抑圧**：無理におさえつけること。
- ・ **葛藤**：もつれ。心の中でのあらそい。



●「子ども」は近代に生まれた考え方！

●幼少期に必要な過程を経て自我を形成する！

近代以降
「子ども」

近代以前
「小さな大人」

〈脱中心化〉

〈エディプス・コンプレックス〉

〈基本的信頼〉

〈寸断〉